

# 『全唐詩』中に見える沈約

資料稿

岡田充博

四年程前のことになるが、水谷真成先生がまだ名古屋大学におみえの頃、大学院の演習の時間に沈約がテーマとなった事があった。その際、六朝・隋・唐期の文献の中から、沈約に関連する資料を抜き出してみるとという作業が計画されたが、私達院生の怠慢からいまひとつ意気が揚がらず、作業は中途と言える地点にも辿り着けないうちに早々と挫折してしまった。

その時の後ろめたさが消え悪かったせいか、その後私は、「沈約」「隱侯」等の言葉に偶然出会ったたびに、それをメモに取っておく習慣になった。二〇二三年ばかり、必要があって『全唐詩』を通覧した際にも、これといった当ても無いまま、メモだけは書き残しておくことにした。

『全唐詩』中に見える沈約々として以下に提出するのは、その一応の集成である。倉卒の間、しかも片手間に行なった作業である為、思わぬ遺漏が多いのではないかと不安も残る。しかし、落度があれば気付かれた方に指摘していただこうという虫の好い考えで、厚かましく本論集に掲載することにした。

『全唐詩』の中から収集した資料とは言っても、「沈約」「隱侯」と明らかに名指しされてい

るものを拾い出したに過ぎず、暗に沈約の故事を踏まえる詩句・沈約の作風の影響が窺われる詩作品等にまで気を配った周到なものでは勿論ない。しかし、それでも、唐代の詩人達において沈約という人物がどの様に受け止められていたかを知る上での、ひとつの縁にはなるのではないかと思う。(ただ、そうは言っても、唐人における沈約像といった問題を考えてゆく為には、やはり、さらに綿密で広範囲にわたる資料探索の作業が必要であろう。残念ながら現在の私には、それを試みるだけの時間的な余裕はなく、そして何よりも、その困難な作業を意欲的に支えきるだけの切実な問題意識がない。出来れば、どなたか沈約の専門家に試みていただければ——と、これもまた虫の好い考えである。)

なお、『全唐詩』の底本には、上海中華書局活字本を用い、あわせて中文出版社影印本(精装本)の冊数・頁数も付記しておいた。

崔融 「登東陽沈隱侯八詠樓」

隱侯有遺詠、落簡尚餘芳、  
(卷六八・七六五頁)(一冊・四四三頁<sub>下左</sub>)

崔顥 「題沈隱侯八詠樓」

梁日東陽守、爲樓望越中、  
(卷一三〇・一三二八頁)(二冊・七三九頁<sub>下左</sub>)

孟浩然

「陪獨孤使君同與蕭員外證登萬山亭」

何必東南守、空傳沈隱侯、

(卷一六〇・一六四六頁) (二冊・九〇四頁上左)

「夜登孔伯昭南樓時沈太清昇在座」

沈生隱侯胤、朱子買臣孫

(卷一六〇・一六四六頁) (二冊・九二頁上左)

李白

「送王屋山人魏萬還王屋」

赤松若可招、沈約八詠樓、

(卷一七五・一七八八頁) (二冊・九八三頁上右?)

包何

「婺州留別鄧使君」

江山婺女分、風月隱侯詩、

(卷二〇八・二二七三頁) (二冊・一一七五頁下右)

杜甫

「蘇端薛復筵簡薛華醉歌」

何劉沈謝力未工、才兼鮑昭愁絕倒、 (卷二一七・二二七〇頁) (二冊・二二九頁下右)

「寄彭州高三十五使君適虢州岑二十七長史參三十韻」

高岑殊緩步、沈鮑得同行、 (卷二二五・二四二七頁) (三冊・一三一七頁上左?)

「解悶十二首·其四」

沈范早知何水部、曹劉不待薛郎中、 (卷二三〇・二五一七頁) (三冊・一三六一頁上左)

「哭王彭州掄」

新文生沈謝、異骨降松喬、 (卷二三一・二五五〇頁) (三冊・一三七四頁下左?)

韓 翃

「祭嶽回重贈孟都督」

從騎盡幽并、同人皆沈謝、

(卷二四三·二七二七頁) (三冊·一四六四頁<sub>上左?</sub>)

朱長文

「宿新安江深渡館寄鄭州王使君」

賦詩忙情有意德、沈約在關東、

(卷二七二·三〇六四頁) (三冊·一六三四頁<sub>下右</sub>)

崔 峒

「度州見鄭表新詩因以寄贈」

平子四愁今莫比、林文八詠自同時、

(卷二七四·三三四八頁) (三冊·一七六九<sub>上左</sub>)

權德輿

「酬穆七侍郎早登使院西樓感懷」

詩輕沈隱侯、賦擬王仲宣、

(卷三二二·三六二二頁) (三冊·一九一〇頁<sub>下右?</sub>)

劉禹錫

「答東陽于令涵碧圖詩」

東陽本是佳山水、何況曾沈隱侯、

(卷三六(一)·四〇八一頁) (四冊·二五五頁<sub>上左?</sub>)

「武陵書懷五十韻」

沈約臺謝故、李衡墟落存、

(卷三六二·四〇八七頁) (四冊·二一五八頁<sub>下右?</sub>)

張 籍

「新城甲城樓」

郡化黃丞相、詩成沈隱侯、

(卷三八四·四三二八頁) (四冊·二二八六頁<sub>上右?</sub>)

元稹 「再酬復言」

休文欲詠心應破、道子雖來畫得無、  
(卷四一七·四六〇頁) (四冊·二四三六頁右)

劉言史 「處州月夜穆中丞席和主人」

忽見隱侯裁一詠、還須書向郡樓中、  
(卷四六八·五三二九頁) (五冊·二八二九頁上右)

許渾 「送段覺歸東陽兼寄竇使君」

沈公如借問、心在一作浙河南、  
(卷五三一·六〇七一頁) (五冊·三一九六頁下左)

李商隱 「漫成三首·其二」

沈約憐何遜、延年毀謝莊、

「同 · 其三」

此時誰最賞、沈范兩尚書、  
(卷五三九·六一五六頁) (五冊·三二四〇頁下左)

「韓冬郎卽席爲詩相送一座盡驚他日余方追吟連宵侍座裴回久之句有老成之風  
因成二絕寄酬兼呈畏之員外」

爲憑何遜休聯句、瘦盡東陽姓沈人、  
原注：沈東陽約嘗謂何遜曰、吾每讀卿詩、一日三復、  
終未能到。余雖無東陽之才、而有東陽之瘦。  
(卷五四〇·六一八三頁) (五冊·三二五三頁下左)

「寄裴衡」

沈約只能瘦、潘仁豈是才、  
(卷五十四·六八九頁) (五冊·三二五六頁下左)

「自桂林奉使江陵途中感懷寄獻尚書」

張衡愁浩浩、沈約瘦悵悵、  
(卷五四·六三九頁) (五冊·三二八〇頁下左)

「有懷在蒙飛卿」

哀同庾開府、瘦極沈尚書、  
(卷五四·六二四八頁) (五冊·三二八六頁上左)

皮日休 「雜體詩·序」

梁武帝云、後牖有朽柳。沈約云、偏眠船舷邊。由是疊韻興焉。

(卷六六·七一〇一頁) (五冊·三七〇五頁上右)

陸龜蒙

「奉和襲美二遊詩·徐詩」

……爾後國脆弱、人多尚虛玄、任學者得謗、清言者為賢。直至沈范輩。沈約、范雲  
皆藏書數萬卷、始家藏簡編、御府有不足、仍令就之傳。

(卷六七·七二三頁) (六冊·三七一四頁下右)

「奉和襲美新秋言懷三十韻次韻」

沈約便圖籍、揚雄重酒肴、  
(卷六三·七二六四頁) (六冊·三七三九頁下左)

「奉和襲美抱疾杜門見寄次韻」

但醫沈約重瞳健、不怕江花不滿枝、  
(卷六四·七二七八頁) (六冊·三七四七頁上右)

「酬襲美夏首病愈見招次韻」

蕙帶又聞寬沈約、茅簾猶自憶王微、  
(卷六二五·七二八二頁) (六冊·三七四八頁下左)

「奉和襲美夏景無事因懷章來二上人次韻二首·其一」

麗事肯教饒沈謝、談微一作微談何必滅宗雷、  
(卷六二五·七二八四頁)(六冊·三七五〇頁右)

「戲題襲美書印囊」

應笑休文過萬卷、至今誰道沈家書、  
(卷六二八·七二二頁)(六冊·三七六三頁下左)

清畫

「講古文聯句」

隱侯似病、創制規矩、時見琳琅、惜哉榛苦、

(卷七九四·八九三二頁)(七冊·四六一三頁上右)

皎然

「送沈居士還太原」

名重郊居賦、沈休文作郊居賦、才高獨酌謠、

(卷八一八·九二一八頁)(八冊·四七四六頁上左)

「哭吳縣房肇明府」

幸願示因業、代君運精專、沈約死後、冥中見十(作十)、因師云、師急為我造經、捨(作拔)我苦難、

(卷八二〇·九二四七頁)(八冊·四七五九頁上左)

貫休

「和韋相公詒婺州陳事」

耕避初平石、燒殘沈約樓、

(卷八三一·九三七九頁)(八冊·四八二三頁下左)

齊己「靜院」

肇硯興狂師沈謝、香燈魂斷憶宗雷、  
(卷八四四·九五四三頁)(八冊·四八九五頁右)

「付錄」

「八詠」

孟浩然「同獨使君東齊作」

寄謝東陽守、何如八詠樓、  
(卷一六〇·一六六三頁)(二冊·九一一頁下右)

嚴維「送人入金華一作贈別東陽客」

明月雙溪水、清一作春風八詠樓、  
(卷二六三·二九一五頁)(三冊·一五六一頁下右)

李商隱「細雨成詠獻尚書河東公」

府公能八詠、聊且續新題、  
(卷五四一·六二五〇頁)(五冊·三二八七頁上右)

「八病」

姚合「武功縣中作三十首一作武功縣間居」  
其三十

詩標八病外、心落百憂中、  
(卷四九八·五六五九頁)(五冊·二九九九頁上左)

「東陽」

元稹「獻滎陽公詩五十韻」

西蜀凌雲賦、東陽詠月篇、  
(卷四〇七·四五三三頁)(四冊·二四〇一頁上右)



羅 隱

「秋日泊平望驛寄太常裴郎中」

北海尊中常有酒、東陽樓上豈無詩、

(卷六五八・七五六〇頁)(六冊・三九四三頁上左)

張 說

「過庾信宅」

獨有東陽守、來差古樹春、

(卷八七・九五三頁)(一冊・五三九頁上左)